

# “魔法の言葉”で、High Yieldを開発せよ！

## 上田剛士

洛和会丸太町病院 救急・総合診療科



**診**断に最も寄与するものは病歴です。

それはさまざまな検査技術が発達した現在においても変わりません。患者は自分の病名を語るとも言われます。しかし、そ

れを読み取るのは必ずしも容易ではありません。

「平地はまだしも、階段での移動が苦手」という訴えだけでは、診断を絞ることは難しいでしょう。それが呼吸困難のためであれば、心疾患や肺疾患、貧血、神経筋疾患を考える必要があります。もし移動が苦手なのが疼痛のためであったり恐怖のためであれば、鑑別診断は全く異なります。

では「階段を昇ることはできても降ることが苦手」だったらどうでしょうか？ 心疾患や肺疾患では説明が困難です。つまり、これは診断を一気に詰めることができる“魔法の言葉”です。ここに腰痛や下肢痛が加われば、腰部脊柱管狭窄症という診断に辿り着くことができるでしょう。一方、「転びやすくなり、本を読むのも苦手」ということであれば、進行性核上性麻痺を疑うことになるでしょう。

本特集では、このように確定診断に役立つ“魔法の言葉”を集めました。今まで聞き流していた患者の言葉が、もしかしたらそれだけで診断を確定する“魔法の言葉”なのかもしれません。本特集で取り上げた言葉が、「皆さまの診療スキルを劇的に向上させる魔法の言葉」になることを願っています。

G

## 志水太郎

獨協医科大学 総合診療医学講座



「大切なものは目に  
見えない」。サ

ンテグジュペリの名作『星の王子さま』に登場する、目に映るものだけでなく心の目、純粋な視点で現象を眺めることが大

切である、という言葉です。

遠山の目付同様、臨床ではこの「眺める」という感覚がとても大事だと思っています。全体の観察から何の情報に違和感があり、何が「尖って」いるのかを見つける能力は、総合診療における俯瞰する力の中のコアと感じます。High Yield に気づく能力を養う方法は、それに親しみ、医学的関心を持ち、数として経験することで、そのHigh Yield 軍団の総体的なテイストや病歴上の尖り具合がわかってくると思うのです。

その意味で、本特集はとても意義深く、教育的です。一方で、本特集のような形で各症候が「切り出され」て陳列されているだけでは、起動前のN- ノーチラス号（テレビアニメ『ふしぎの海のナディア』に登場する架空の戦艦）のように、ほぼ役立たずです。

最も重要なことは、クリニカルコンテキストであり、各症候にどのような状況で出会うだろうかというストーリーを想像・復元しながら、実際に会う日を楽しみに、そして出会った時に展開されるアブダクションを糧に、各症候の経験値向上はもちろん、そこから派生する新しいHigh Yieldを開発するきっかけにもなれば、企画者として望外の喜びです。

G